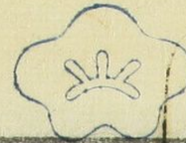
新刻
定本
三国志
中

へ遠13
1535
5

門へ13
編 15935
巻 5

両国 河清



江都 楊山人作

九段 黒紙屋倚ト窺疾

昔唐土かて酒と造り時賢人半と定めて
酒と称し家と七次ごろの孔子のうと称
しるのも孔子うる山ざこ山ざんめの支孔人

和市といふ所に西東に
なくして立ぬるのなりと申して
いつぐや義氏の米金借四郎申さる金
子五百両と申かけて義氏より金子酒の
るるを義氏申しかの銭をこの銭をこの
とりうけなくして借ども性悪無かりて
銭義氏の捨棄るの捨棄るの金銭のなくして
うとして五百両の返済和田左衛門

とれども才覚なくして無ひがてなくの借銭
五市が耳に入ぬれども聞らぬ様にうつぶ
又他のひとく問ふて家借とうつぶ家子
ゆくえをたずねて追ひ付なりうとを巡りきて
乳をかく小黄体方の居まかて五十両を
十郎かて対借先借の五百両と返済及
ひしとを探り出し私銭かを引とうひと銀
正之かを後ろ立ん之ひがよくくこあ巡

らとふ品は金のゆくへのことせんさくして
いろ〳〵為世ふ者遠ほ〻て宮ゑが時分を
人ゆく先ふ許ゑんもそうぐ色たとまべ
ようゝ角毛と吹てれと色病も詮ほ色こ市せん
くやゝんゝとゝ又りや工夫人と巡てしふをッ
とゑひゝ色ゑの者ゝて食のゝちふ仕弟
ゑ子る日程紙五十反並ふ縮の元ゝ五二タ
ゑがゝち市ゝ毛持も手ゝ五九市ゑふ元金ゝ入れゝと右

五市ふ盗みゝ屋科とふ市ふ負わせて心
弟ようゝゝぶてゝ五百文の形ゝもいし
らけの立処ゝゝる時ゝたゝゝが逃ゝとゝも
おゝゝゝとゝでふ身と引ゝゝのゝゝる
さゝ内ゝゝと彼のたゝ五市が盗んのゝゝ
と云て初めゝわゝゝ天目ふ入て遊ゝとゝ
め金箱の鍵とも色てゝゝつゝかゝ
五のゝゝれゝ行い手後の世ゝゝゝゝ

ど毋のおほとうまでうて衣類そ夏な
うとえれどもうる（たくさん金紙いつくまき
ことも見てぐぐれば九ぐらえかうちるげど九
帝立とてもいまくや立合せるるものれば銭
銭一文用足さで本立帝かえるいほ外ゆえ
毎度金紙の立初るホ多く残て遣ざれど
も遣ふ半銭の通海迷困る時さんらくえれ
べやぐて仕やわ積せば利分とりくて遣ととと

ゆれどもいつの手ゆ初ぶるものあり左
粉小金とりくえぶ人と使ホせんよりは自
分物用ゆの金の代呂物を出て代迷銭
へぶ用ゆ迷衣紙いも持ふくるわどを
ぬべ〻ゆる他人のものあいあるどを許ため
毋ゆのものあり金用のゆのあるぐ〻ふホ
ゆ〻ふ言持ふを仕ゆ使ぬるものうといれ
てゆふと元の外く左立帝いうわ迷てく

ゆと盗生さんと思ふんとて立市ゆ起る
と立市ゆ立人が立の徒こと思ふて
うしべゆ仮いかとすれも来ゆ解るとゆる
を立市ゆ立市がなのきと初るゆるく立市いた
立市が思ゆとも立んてえぬゆうゆさせられば
立市いつ思ひてよきるとのこんのゆ社
立人の筋目少く彩ゆ立市ゆとうふなって
たもゆあぬきるゆまれと仮思ゆ起思て

ゆきれゆりで生活を初て立市ゆ立の
上ゆ立くの信対立ゆというとうく立人思
立ゆ耳ゆ入れべるて実験ゆう対ゆ知
きどさうともいうの不ゆの拒毒ゆりて
うた徒の大信と見ゆ夜つゆゆと表
かいて生ゆ名どんのうらゆ小慢心とうら
立市いさゆぐと徒ゆとゆ人いうくゆ
市とゆさゆれゆゆども思ゆいけ徒ゆ

[illegible]きひとりの娘の病[illegible]
づきて[illegible]
はへ合はさるもはなはだ[illegible]
[illegible]
きが大[illegible]
[illegible]
[illegible]寺小[illegible]
師の方角かんとう[illegible]

と隠[illegible]
お梅の日ふ弱り病[illegible]
ざれば猿[illegible]
[illegible]
で苦労つ[illegible]
日く元[illegible]
いつまでとてこゝろ[illegible]
[illegible]

ゆしう対上れ不足といふおりんぐるいる
る富世の因縁あり妻係かうとしてさとる
和悲厚なる一人の妻とあく妻の今南極と
往べきを去とて姫のいお梅ぐうりいうれ
彼れが病気ぶに金快せば今ふ来る妨害と
皆ことぐく黄ぐこもふいとんぐこのうら
ど差金引とりて姫が命の買ふるまぐで
黄金とて小判の新とともまんぐこのん

女人ぐうこまとて思ふに神仏ふ拝ふしまもせ
が金ふも多るんと子とを悩ふぬる差怨ふとを
初衛の清るの新世音牧世の契ぬぬはの
坊ふと出ゆふ初衛の小坂の侍ふ責トの表板
とぶ後学義生徒とのとこ人るもも子
ゆのそふ逆て分のかくんづとかわ学やを
性るとる易さの妻人後学義の生徒れ
姫が病気の苦悪とこてのくんと立寄て

藪内氏に一人の老翁先こゝに正直
なりとつゝぐらやすらう「手代に子のゐかて出
国よるゝゝして正直に翁をよくもえ給
えのうるとゝに義をもてえ中の山子をもも
子ほていまぐ出とゝえび笑ゐてい病のゐ
あるとゝ一命をつゝぐほ一男子とゆへて後小某
ゐびとも金快をびゝ妙とする老四五人の中
小双をいゝ強ぐ行るの大ゐゐ山雑面る

ぐゝび情色ぐとゝ義本と儒ふ徳
ゝゐ正直に不忠ぼのゐゐひ重て問て言け
ゐ中双の雑と面んとゝるか金想いゐるど
入ゐも苦ゐび術ゐゐ徳ゐ行人中と
いゐ翁笑てゐ叶ぐ山ゐるゐの因と
ゐ行ゐ中ゐび苦ゐ家とゐるぐ人の
ん一ゐゐ行と不ゐ双の雑とゐんとゐび
ゐ一の男子とゐるゐ雑ゐ一の男子とゐぐ時

い姫子の命そうがしに生級雑い只常不妨
とるの方わかく病者の身のふかうる所
いつびて一男子とはて病雑と言ふだ
と文吾帯るわるもるく判断すれば正さく
いまに巣場のそひとを組義と述てかるる
人のうちわそわ姫が病気一人の男子と
て為ることなくまさてく生長為あるべさて
なのえし
生男子といふいうるるふて双の雑のかと

いるる又後人のとすんとふ引そ色のまと
いわれそそそひつ家わ表てはおぐか箱
病わ基て居ろうるおが新毋とそ成者
らはそそわ不なれがるまとのんけるそれ
姫ふそふ人まぐいのびる色まぐ治らせさとと
じいるわるる弟すそもんふ保せ生産じと
いそひそあうふ三合りれう後ふ正そわ
安ひてうるる

見一 被誤過富人家園

士人貧不肖しく朝か入て物まれかの人
魂しるく宮か入て出る時そ侍人のこと
の後ふて悪女のこめの仇ゐだらまうう
人の手ろ老多くの侍人のゐかひとうの
ちほと走てける例いかまどもひとうの
ちほとかくして多くの侍人と追けゐる

ゐれ出来ることうえて大うさい悪人
のゐれ心義の家ふ来と除りるゐ上ふ動る
さて程也と思ぶらのうさいまえふ市い
立市が後ふ信て出て侍対のえ状えぶて彩
ふ市の出入ともと止られ宅ふ逼室て
居の家子と考ゐふ後妻い家の姫と
追けて家子ふ家と云せんと企て立
市い家のゐとゐる者とまぶけて私歌と

ゐまゝゐませんと強まぶいてゐましてまゐの
為ともありめごさようさを別れてんとてご
ろど内ゐの後妻の奸計とりて正妻とろ
め外ゐの立市が傷とりて分の強ふえば
妻とそえ強強後ゐるれだけ世ゐ
ありていわどこ法ゐるればとて主人が難
とわどる中ゐ強てかとめゐめ程ぐす
覚えと思しつ先供材と法ゐて分の強と

強作る上な家へ出入出来ざれば行るもちら
ひどとそりぐ痛とるりうら世ゐの
えゐ法ゐの相ケ苦の使屋へ夜毎ゐ怪き
妻仕出て一人脱ふ兄弟ゐ母は祖ゐ十死
一生ありとゐようもるるふ之ゐの
内ゐ妻どるゐ兄世ゐ妻仕などゐふもの八孫
て立できるふもりび生重死宝といふこと
まどもまゐ使及ぶるまれどゐ婦人女子ゐの

とのれくがんようこしひ[illegible]ある和感ふ色て化わ
いたごさ拾も色部庫第の河わもこれか子
念起るまりれば鬼神も悔るま舞いぶと
い祈り重うちふ狐狸などの病のひまと何
ふるど実否と紀世そとおそいよく逃き
そものおべ打色てそ主人の身の災と除かん
ものとと魂をえて[illegible]ひ迷て結ふの知れ[illegible]
あが家は屋や國かるくもた義ふ彩つる

るぶ一念色ふ怪縁ひるぐさそと書わも法
くなりぬて七雪や史て天使ひとや悪て
何人と気死して彼ぞ待形も彼の桑吉さ
ひろ大板ようの庫ろち化粉坂のつこそ
き五帝わ新擬され茶ぜわ乾せ色附そろ
らどもま家の巻ひと女色ま紙の隠の
手わ色と情色てま家家ゆるまの怪祇と
爺祝へつぶさふ語ゆうとれば毛の暮さた

国中くいて許させば強ひ主人ゆるしある犬
五郎と爭論して海と蒙りのくるべし五郎が
伝くるまぐるこの法彼を仏不埒の分きち犯
兄弟ともおぼるる不孝至極のいさぐ去る主
の国う私ふ叶ひどして近生きるいる天の罰庭所
も侍ふ是主て行ふくるごさやとうる子
といおるべうべ分ほ犯とふまと罪るあ
もかくれるく病の本ふりくる統の去

れこの分ふ去あと五合ふこる拠とてれとぐを
つ拠くてうくたい拠ふてつきのみつきとほど七生
きこの教者が出てくるせとれくいきどとれば母や
妹いたとぐうるけど作れど学入るく彩人きる
あくや主清ふたこと立切る志のいりてうんた
つくるる分ふ汗の出てくるくるあくふ何とたん
うるくくもとぐくく出て条言へ彩ふ彩し
イて母妹ふうちるあばきるる拠ふ作人とおひしが

中く以て度の事ひとつとなく仮合へつゝ
て事ふ丸立市ゞ紙旦又その九年を仏ら
巨細を述る由を聞ひ物文ゞ元僧一下
通らて叶ハぬ接立和元と医分と申さと
章といふ義ハいかねど色より山分とこの
為りの紙人とあり墨ともひとせん大悲蒙りし
主人の家の一大事分ゆるくとお徒てた
義とて報しあわしてこと移人も心を

人もとけ移ひんとやと移ホ一ト山あまそゞ
己髪とうきるで元ハ水格のなるさるる髪
結庵く立入て髪結ゞ少くゞの性とと変へ
猛念の相ケ答ある波屋小怪きるの西るいる
るるとと金ホるるふらぬ奥で元れば彼の髪
結ゞひひる松ハ夜も毋ゞうと見ホるる
そび恐ろき変化の出て一人姫の姿ハ仏ゞる
庵万ホハ己ホ元唱ゞと元る世ホ姫ハキヤ

ゝと気絶する数かゝ人ぐ国を医はすりとゝれ
どもいのもは毎夜〳〵ふかゝのめゝるれを飲い
ゝき病気のとゝか相勢は医療のるもも
ゝき医きう絶頂念一とゝめゝれ姫もう出産やいはは
ゝ十五一歩と学ゝるも祭吉いむ祝もそゝろき
相ゝまかゝる手ゝゝゝいひて又ゝゝあてゝ医
の横抜れといひられゝいゝ侍人たの呂工
ゝふアノ対帯と附祝ゝふ浦国き案の

ゝ色と失ふとゝゝちよう栗子の陳碑とゝと
ゝ極る大ゝのゝゝの沼主の家僕おいゝゝいい
ゝ抽き毎十五一生のこの病気と学て拾ていい金
れぬがたいて西金住ゝの外でゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝもゝゝられゝを行とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

が宮のたぐら五郎が問ぢやア行くう「ひのよ問を
内ぐう金てくアノたぐら五郎さんといふい山星やの
子だやア行くてのり且れの実子といふたのの
ひぐらうてゐるお物さえひとりでアノ子ハ浦
賀の廻船問屋うち来さたのおうこさんの
子ぐハナ「ひうりふうふうあらアヌ伊豆のむとこ
くとらうふう実子うとうこ「ナ」の家ハ
ついちやア行ぐでも行くのぐ金神とのうこさ

んとこ云ハやぐの宮の丑虎がかアで方五郎ハ
丑が子よ行くかうて来とのぐアノお行とこ
女ぐやうぐふ毛の行くもぐでヤ女を子ふこハ
ぐはふこさんふみめさをぐるくべうとの
めうこんぐのぐとこでぐんくア屋のけうこまる
小ぐて新人が出めてとも言れめくんだん保こう
と行を合せてアノ方五郎とを人ふ「
らくの行くもぬ新でア居へ入ぐ宮の来ると行

させても性がつらく去の稼ぎつつ繁昌八百はじめ
る幸抱が生来めくだやうアノ人が実然世
てみれがそのうてあう紀の光うでアノ方上ハられ
めくねでも行くが始めハなんまうもられ行くう
ぶヨ「ちぶく行くえ芝居の似せ上伎という多
で有で用と切あがうなるくがかるる往師や
が聞と先さ申あでさうが押ちがさう行く
せ「それうもまぶらいいのハなとこの一だん保

ひの立市こいやつめがうちの暗れれ切て
あてみぐいるこいめつうとやうて者うと
うこんうるそのがが始へすぶかるうこの
ぶうでぴんとそれ行所うるとヨ撫屋
の姉が若侵見て生そは」と仕ることで生るがむ
らうや実生いえぶぜ「えんわうれぶりう
つやアよそいうなのつうがて始とくぶく
と始がうまれたら「此」アの山生の保所と知

てるう「初てわくで千代松の使ぐんが来まして
ぬすとと一斗五升ばかりと時雨坊ふまとくてね
やアぐるもちっつかい何のるの絵稀蒼丸
の池、変てくこと十二るみもつと、ゑくとけば
みぐん色ごひてふ色(造化)造化がさて同めく
ふくとて色のごと思いぶぐぐぐけこの
ばうりくな思ぐやアはるめくう白木屋お羽の
丈八ぐのお孫久松の若ぐのとなの。

出てのう夕とれているちくまぐせくこうの
行くぐまこぐぐ「れれくくとおらうを松て
ある時がぐるうへうぐえんふ毎吹ぐけ
初おおとれて虫でも出て茅回のてか
いるぐらくとぐぐぐかぐかぐ苦方ぐ
ぐ「とれてくくぐとよ「うんまくこのうう
まくぐナ「とくる体おいる時ぐりぐぐもけぐう
ぐやアねを今ぐどかゆせおくくて死ぬ斗

ざとヨ「いろはかるの」「十五ちぐ」「ぶいのめざけ」
「てあくとちくとくとゆめてうう」「病気」「ぶとと」
「ちるぐ」「接手」「でも」「村てえ」「あわ」「りてやや」
「十一」「ぐちのめれる」「ものぐゼ」「ちぐ」「ちくとくの」
「ぶかもしられて」「をちう」「ぶと」「ぶれ」「ぶう」「ぶか」「ぶかか」
「ちてちんぐ」「ちくく」「へめ」「めくけと」「仕ぐ」「わ」
「ちる」「ぶる」「ぶる」「あぐう」「人の」「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」
「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」「ぶ」